



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

<司会>

ただいまより、慶應義塾創立 150 年記念、内山秀夫名誉教授の講義を開催いたします。

本日は、慶應義塾三田キャンパスにお越しいただき、誠に有難うございます。御蔭様で慶應義塾は 2008 年に創立 150 年を迎えることとなります。これもひとえにたくさんの皆様のご支援、ご愛顧の賜物であると、心より感謝申し上げる次第です。

本日の講義は、創立 150 年を記念いたしまして、「復活！慶應義塾の名講義」と題して、長く慶應義塾においてご教鞭をとっていただきました先生に、改めて感謝いたし、その意を表すために、慶應義塾のキャンパスにお戻りいただきご講義を行っていただくというものでございます。また、先生にご指導いただいた、たくさんのご卒業生、関係者の皆様にはご卒業後も発展を続けている慶應義塾の姿をご覧いただくとともに、懐かしい恩師の講義を受講していただくことで、改めて学問の素晴らしさを感じ取っていただくという企画でございます。本日は、ゼミ、法学部以外の方にも広くご案内させていただいておりますが、先ほどご説明いたしましたご趣旨による講義となりますので、若干卒業生向けの内容となるかもしれませんが、ご了承のほど、よろしく願いいたします。また、今後の広報のため、講義風景をカメラ撮影させていただきます。その中で一部、ご出席者の皆様のお顔が入る可能性がございます。予めご了承ください。

さて、本日のご講義は、「敗戦から戦後へ」というテーマでございます。

内山教授は 1953（昭和 28）年に本学経済学部、1958（昭和 33）年に法学部政治学科をご卒業なさいまして、1959（昭和 34）年から 1 年間アメリカ合衆国連邦議会研究員を務められ、副手、助手、専任講師、助教授を経て、1973（昭和 48）年より 1994（平成 6）年まで教授として教鞭をとっておられました。その後、1998 年まで新潟国際情報大学初代学長となられました。内山教授は政治理論、近代日本研究、比較政治史を専攻されておりますが、現在は主に 15 年戦争当時の日本および日本人を外国人研究者、記者たちがどのように見ていたのか、そのような観点で、さまざまな原書の翻訳を続けられています。先月（2006 年 5 月号）の『三田評論』にも T・A・ビッソン著の『敗戦と民主化』（慶應義塾大学出版会）の邦訳に関して内山教授のお話が掲載されております。

慶應義塾
www.keio.ac.jp



本日のご講義も以上のようなテーマに沿ってお聞かせいただけるのではないかと考えております。それでは内山先生、よろしくお願いいたします。

< 内山秀夫先生講義「敗戦から戦後へ」 >

2000年の12月31日に、三田で、20世紀と21世紀の歓送迎会（世紀送迎会）がありまして、その時にしゃべったのが、「命の民主主義」というテーマでした。あとで聞いたら、<名講義シリーズ>ということだった。大体私の講義が名講義なんてあるはずがないのです。つまりこっちで迷っていることをしゃべっているわけですから。それをもって「名講義」というのだったら、おそらくそれは、当たり前のことであって、何も断るまでもない。今回も、実は、迷って迷い抜いているテーマなのです。

< 敗戦の日 >

昭和20年8月15日。私は、満で15歳でした。抜けるように青い空でした。キラキラするような太陽でした。なんていうとカミュみたいな話になっていくのですが、そんな中でどうやら負けたらしいと伝わってきたのです。

学生諸君と前にそんな話をしていたら、「新聞見りや分かったでしょ」と言われて、「新聞なんかあるか馬鹿野郎」。新聞ないんですよ。あったかもしれないけれども、配達なんて、絶対にあり得ない。当時新聞というのはどうなっていたか、時間があったら調べてみてください。新聞社の戦争責任を論ずる場合に、これは非常に大きな問題だと思うのですよ。つまり、伝えない新聞とは何か。

（ひとり入場）ああ、遅れてきて座るとこない…。この教室は私が昭和24（1949）年に慶應に入ったときに、ここで心理学の講義をやっていたんです。その辺にみんな立っていたんですよ。だから一向に構わない。ここに新聞紙を敷いて座っちゃえばいいんですよ。大体、机があって椅子があってそこに座ってそれで居眠りしているような、そんな施設は要らないです。私はそう思っている。話を戻しまして、それで敗戦です。

で、敗戦はあるときぐらいから、まあ、ぼんやり知っていた、という話が友人たちと話しておりまして、よくでます。



戦争に負けたってということは、要するに服を脱いで寝られるってということ。それはよく分かるのです。私もそうです。それから電灯の覆いを外してしまえる。それもよく分かります。だけど、それぞれひとつの世代観からすると、そういうことは共通してあるけれども、でも戦争に負けるって、もっと歴史的なことだったんじゃないかって、いうことで、実はここでストップがかかっちゃうのですよ。よく分からなくなってしまうのです。

つまりそれが分かってきたのは、天皇が「終戦の詔書」っていうのをラジオで放送します。皆さんのお手元の資料に入れておきました。非常に有名な、テレビのドラマでしょっちゅうやっています、いわゆる天皇節。なんかエイリアンみたいな。あれは日本人の日本語じゃないなあっていう気がします。「朕深く世界の大事と帝国の現状とに鑑み…」という、天皇語ですから、「朕深く」、これ、耳で聞いて分かるはずがない。中身を知らないと分からない。これで終わるのです。つまり「終戦の詔書」によって、実は戦争が終わるのです。そういう実感はあるわけです。

つまり、天皇の放送があるよって言われて、それで直立不動で聞くわけです。ガーガーピーピーいっていて分からないのです。それで日本語がよく分からないところで、ラジオがガーガーピーピーですから分からない。二重に分からないところで、つまり「承諾は必謹である」というのですね。これが非常に面白い。「しようしようひっきん」っていうのはですね、天皇の言ったこと、天皇の詔（みことのり）です。天皇の言ったことは、必ず謹め、謹んで聞きなさいっていう、聞かなきゃいけない、ということなんです。

資料では、「終戦の詔書」の次、169 ページ上段の、終りから 4 行目、「政府は国民と共に承諾必謹刻苦奮勵常に大御心に帰一し」という。そうすると、戦争が本当に終わった、あるいは、負けたというのは、天皇の言葉なのです。要するによく分からない言葉で、終わったんだ。もう、戦争はやめたよと、天皇がおっしゃった。一所懸命聞かなきゃいけないということだと思ふのですね。そうすると、戦争が終わったのは、天皇の言（げん）によって終わったということで、これしかないのです、当時は。

そうすると、ポツダム宣言の受諾という肝心なことが出てきません。言葉で「ポツダム宣言」ということが聞こえてきたって、その頃、新聞はないのですから確



かめようがない。私の先輩たちに当時のことを聞いてみますと、ポツダム宣言なんて読んだこともない、と非常にたくさんの方が言われます。それは慶應で、私をご指導いただいたり、あるいは一緒に酒を飲んだりした人たちなのです。

<戦争体験世代のカテゴリー>

亡くなった安田武という方が、戦争体験世代について分類をしています。「戦中派」とか、「わだつみの世代」と呼ばれた年齢層は、3つのカテゴリーに分けられる。第1の世代は、大学を卒業するやいなや軍隊へ連れていかれた世代。これは大体大正6(1917)年ぐらいの生まれの人たち。で、これは戦前にマルクス主義の影響を受けた最後の世代ということ。例えば皆さんご承知の方で言えば、日高六郎氏がこのうちに入る。

第2の世代、これは<学徒出陣の世代>。これはマルクス主義との関連で見えていくというのが、分かりやすい。マルクス主義については、この世代は、きわめて特殊な例外を除いては知らない。知る方法がなかったのですね。だからこの人たちの時代、人格主義とか教養主義の風潮が、かろうじて彼らに軍国主義への距離感を育てた。入営する前に、和辻哲郎の『古寺巡礼』を持って奈良を訪れる。というひとつのパターンがあります。私の兄なんかもそうです。そういう意味ではつまり、軍国主義というものに対する、批判の目はもっていても、例えば理論的に、論理的にあるいは知識的にそれに反論するという手だてはもっていない、ということです。で、これが大体大正11(1922)年から12年の生まれです。

で、第3の世代、これが最後です。<学徒動員の世代>ですね。いわゆる在学中に、勤労働員で工場ばかり行っていた。または、予科練とか少年兵、そういった世代。私たちがそうです。つまりそこには教養主義のかけらもありません。

この3つの世代の人たちを考えてみます。で、私なんか、一番、ご指導いただいた、あるいは一緒に遊んでいた方々の中には、学徒出陣の世代、大体私より10歳ぐらい上です。この人たちに、「ポツダム宣言を敗戦のときに読みましたか」と聞いたら、「そんなの読むはずがないだろう。全然読んだことないよ」と。「いまだに読んでないよ」という正直な方もいらっしゃる。(笑)

<「宣戦詔書」と「終戦の詔書」>



「終戦の詔書」の一番最初、「朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ。」これが出てきます。つまり、天皇の「終戦の詔書」によって戦争が終わる、ということ、私は具体体験としてもっている。ですけれど、この文言のもつ意味については、実は確認していない。つまり天皇が終わったって言ったんだよな。だから終わったんだ。で、そうだとするとですね、今、申しあげた、この、つまり「戦中派」と言われている人たちの共通視点としては、実は、ポツダム宣言体験はないのです。そうして戦争は敗戦した。

これはけしからんと言っているわけではないのです。つまりそういう敗戦ってなんだろう。つまり、どういうふうにしたらいいのでしょうか。私、あえて、「宣戦詔書」を資料に加えているのです。「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス」で始まる、宣戦布告です。これは、当時私は知りません。昭和16年、私は満で11歳です。けれども、これで始まったのです。で、終わったのは天皇の、「終戦の詔書」です。そうすると、この戦争っていうのは、われわれの内部問題、になってしまうじゃないか。天皇と一緒に始めて、天皇と一緒にやめてしまった。その間に亡くなった人がたくさんいた、それは気の毒だったね、あとは一所懸命やりましようねっていう話なんですよ。じゃないですか…。

ここで私の、私的な話を少しさせていただきます。この敗戦前後のことにひっかかってしまったのは、実は、そんなに昔のことではないのです。私自身、先ほどご紹介いただいたように政治理論、戦後政治理論史という分野、その限りでは一所懸命横文字を読んでいる。それで今の日本に必要なものを採り入れていく、あるいは拡張していくというスタイルです。そういう意味では、迷いもあれば悩みもあるわけですがけれども。日本に関しては、「民主主義」を媒介にして見ていくということをやっています。

ところがですね。民主主義でなければいけないというのは、一体どこから出てくるのだろうか。なんで民主主義なのということは、実は出てこないのですよ。天皇の宣戦布告に出てくるわけがない。それから「終戦の詔書」にも出てこない。そうすると戦後の民主主義ということ、あるいはその民主主義によって追求すべきことを、どのようにわれわれは叩き込んできたのか。

それは私のあとの世代の諸君らも、同じなのだろうと思う。私たちの要するに、



出場（でば）、脱出口が実はないんですね。つまり、民主主義って言うていけば済んでしまう。だけど、どうもそうではない。どうも民主主義でなければならないという根拠がない。この根拠を見つけなければならない、というところに行き着くんですね。

<価値の追求>

なぜ民主主義なのかということ。戦後だんだん豊かになってきた。かつてのひとつのテーゼだった、民主主義は豊かでないと育たない、貧しい民主主義なんかありえない、貧しさと民主主義はつながらない、という一種のテーゼがあるわけですね。とりわけ日本の場合でいうとですね、豊かになることによって民主主義というのは広まったのではなく深まった、深まったのですよ。<日本型の民主主義>って言ったのですね。つまり日本型の民主主義というのは、ここであやしくなった、いやいや、あやしい。民主主義で何を追求したのでしょうか。つまり、それは、価値の追求ですね。人間の行為というのは価値を追求していくことですから、理想といってもいい。例えば、フランス革命で立ち上げたのは、自由、平等、友愛ですが、これらは無限に追求する事柄、価値ですよ。つまり実現し得ない。完全な実現はあり得ないという意味で、大価値ですね。で、この大価値の追求というのが、実は民主主義なのです。大価値を追求する場合に、いろいろな障害を排除していくという努力が民主主義の努力なのです。

ところが、そんなこと誰も言わない。日本国憲法があればという言い方は確かにあったのです。私もある意味で、そう思っています。ただ、あるだけではダメだっていうことも知っています。獨協大学の古関彰一先生がいらしてると思うのですが、中公文庫に、『新憲法の誕生』という非常に優れた先生の本があります。是非読んでいただきたい。そこで古関先生が懸命になって追究していく。新憲法によって、民主主義の何が保証されているのか、何を追求していくのか、ということが非常にはっきりしてきます。

むしろ、当時の憲法を作る段階での日本というのが、いかに戦争に負けなかったか。変な言い方ですね。逆説に見えますが。さっきも言ったのですが、戦争に負けたんでしょ。その負けた戦争でもって我が親愛なる大日本帝国は、何を守ったのですか。大東亜共栄圏ですか。大東亜共栄圏、いいじゃないですか。ひとつ



の理想として掲げうるのですよ。だけれど、残念ながら、それは全然リアルではない。リアルでないどころか、リアルなものにどんどん傾斜していったときに、それは似て非なるものになっていったわけです。そうでなければ今、東南アジアを含め、東アジアの人たちが、われわれに対してこんなに不信感をもつはずがないのです。それは残念ながら、〈大東亜〉ということでもって考えていたことと、したことが、あまりに違いすぎた、ということでしょう。

〈「戦後」という数え方〉

「戦後」という言葉を考えてみてください。1956（昭和31）年だったでしょうかね、『経済白書』で、「もはや戦後ではない」と言った。それから中曽根政権ができたときに、中曽根さんがですね、「戦後政治の総決算」と言った。この戦後ってという言葉は、保守陣営の人にとっては嫌な言葉らしいのですよ。つまり、「戦」とついたのが気に入らないのですね。「戦い」という字があるのが気に入らない。だから佐藤栄作氏が、ノーベル平和賞を受けたという、非常に不思議なことになります。その佐藤栄作氏が、「沖縄が返ってこなければ戦後は終わらない」と言って、威張っちゃった。返ってきたって何も終わらないと、私は思っていますが。どうも戦争ってというのは、保守の人たちにとっては、早く消したいのでしょうね。

ところが、去年の戦後60年。私は最初、戦後60年という数え方はないだろうって思っていたのですが、そうしたらあったんですね。つまり、団塊の世代です。堺屋太一氏がつけた名称ですね。つまり敗戦直後に生まれた人たちが、60歳定年を迎えるという年がくるのです。そうすると、これは保守の諸君にしたって、「戦」を消せないですよ。厳然たる事実ですから。その人たちにへまなことを言って、逃げられたら、もうガタガタになってしまいますから。やっぱりご苦労でしたって言わなきゃならない。そこです。戦後という言葉が、つまり生き返ったんですね。つまり保守の人たちも使わなきゃなくなりました。保守という言葉、私もかなり保守なんですけれどね。だから「戦後」を解消するというのは、実は、保守の人たちにとってひとつの、要するに、念願なのです。その戦後がむしろ今、去年、確立されたというふうに私はみた。

そうすると、この意味はもうひとつある。歴史の数え方のひとつに、元号がありますね。平成なんていうのは、全然わからないですよ。昭和は非常に良かった。



25 を足したり引いたりすれば西暦になるのですから。平成になると全然分からない。今度は「戦後」、っていう数え方がある。戦後何年、っていう数え方ということです。これはれっきとした数え方なのです。それはもう、本当に大事にして欲しい。つまり、慶應 150 年なんていうのは全然、関係ない。(笑) だけど、戦後はそうはいかない。どうかそこをひとつカウントしておいていただきたい。

その戦後の数え方が、もうひとつの戦後の内容みたいなものです。さっき申し上げた安田武さんが、「戦争体験」ということでカウントされた。ところが「戦争体験」と「戦後」とは結ばなくなるのです。これは申し上げるまでもない。当たり前です。体験というのはそう簡単に追体験できるものじゃないのです。しなくていいんです。当たり前ですよ。人間 2000 年の歴史。いちいち追体験できますか。はっきり言えば、教科書に書かれることでもって一丁上がるんです。ただ、なんかの拍子にひょいと迫ってくるときがある。その時に逃げないことです。

逃げないってというのは、どういうことかと言いますと、その方が、戦後何年っていうふうに数え上げたときに、例えばご自分のお父さん、お母さん、あるいは兄弟、皆さんの場合は戦後で数えられる歳なんです、皆さんの孫ぐらいまでは。皆さんがおかしなこととして死んじゃうとお孫さんあたりが、俺のジイサンはねっというんで、数えるかもしれない。昭和や平成で数えるのではなくて、戦後で数えちゃったりすると、面白いのですけどね。

<一身二生を生きる>

実は、皆さんのですね、一身二生を聞きたいのですよ。聞きたいといたって、私が当てるわけにいかない。これは講義と講演の間ですから。(笑) すみませんが先生と言いませんよ、福澤で通しますよ。福澤諭吉はもちろん、『文明論之概略』の緒言で、「恰も一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し」という、有名な台詞を言います。これは、ひとり人間が二つの人生を生きるっていうことは必ずあるのです。福澤のように、漢学、儒学をやっていた人が、かなり早くに蘭学にいつているわけですけど、この、今申し上げたものの前の、「方今我国の洋学者流、其前年は悉皆(しっかい)漢書生ならざるはなし」という有名な、つまり、漢書生から、儒学者からですね、つまり蘭学、洋学、西洋学に転換していくわけですね。これを「一身にして二生」って言っているのですね。二生を生



きる。一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し。「一人にして」、両身って二つの身と書くのです。「両身あるが如し」って。これはみんなあるんですよ。あるはずなのです。あの戦争を経験した人は、これは否応なしに、「一身にして二生」であるわけです。

さっき申し上げましたように、私が慶應に入ったのが昭和 24 年。この教室で心理学を聴いたなんて話をしましたが、一番びっくりしたのは、どの講義にも戦争の「せ」の字もなかったこと。こっちはまだもやもやしている。ところがないんですよね。私のもう少し前の人たちですと、学生大会なんかの時にまだみんな軍服を着ていた。私が入ったときはもう、そういう感じは全然ありませんでした。焼け野原でしたから、入学式だって、そのへんで座り込んでやったんです。そのとき、みんな詰襟を着ている。短靴履いて、革のかばんを提げていたんですよ。私はびっくりしちゃった。これがお坊ちゃん学校か。(笑)

「一身にして二生」を詰めていきますとね、私はどういう二生なのか。普通で言えば、軍国少年。丸々15年間軍国少年だった。そこから180度の転換でもって、民主主義に変わる、普通はそう言うのです。表現としては間違っていない。16年目からの経験、これは懸命な人為的な努力ですよ。自分で努力しなくちゃいけない。前の15年間の経験は、刷り込みに近いですから、いろんなことが頭の中に納まっちゃっている。

この間も笑ったのですけれど、歴代天皇の名前、神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝霊、孝元、開化、崇神…って、これで124人。昭和天皇がなくなりましたから、昭和って最後に入るのでしょうか。「軍人勅諭」だとか、「教育勅語」を、悔しいけれどまだ覚えている。そうすると福澤たちが二生、つまり儒学者から洋学者に転換する。それを投影してみると、大変な努力なことがはっきりします。

敗戦によって、われわれは自由を強制されて、それで民主主義者を名乗るということなんです。やっぱり福澤の儒学者から洋学者への転換と、同じような転換なんですよ。ただ、なぜ強制されたかというのが分からない。どうもわれわれのやったことは悪いことらしい。で、そこらへんがずうーっと霞んでいるわけです。はっきり言って、どうしていいか分からないんですよ。そこに手を突っ込んだらえらいことになる、ということなんです。私と一緒に勉強してくれた学生諸君が、



ここに随分おられるようですけれど、あの当時、私に、その質問をした人はいない。きっと労わってくれたんだろうと思うのです。私、自分でその一点は誤魔化しているなって、気が付いてるんです。気が付いていても突破する方法が見つからない。私は軍国主義者ではない。ただ、だから、民主主義者であると言い切れるかって、何が民主主義かよく分からないんですから。言えるわけがない。

＜負けて目覚める＞

で、そのときにぶつかったのが、吉田満という人です。いつごろでしたか。一般紙で「論壇時評」をやっていたときか、『朝日ジャーナル』で書評委員をやっていたときかもしれない。なんとなく手にとって読んでみたら、ものすごくショックだった。私と同じような経験をなさった方が随分おられるらしくて、その後、折に触れて目にしたことでした。今ですと、吉田さんの『鎮魂戦艦大和』という作品集（講談社、1974年刊）に入っています。

臼淵磐という海軍大尉、21歳。少尉、中尉が出撃の前の日に、大喧嘩をする。殴り合いをやるんです。学徒出身の士官の少・中尉が、このままじゃ死ねない、と。大和は特攻ですから、行けば必ず沈むんです。沈めば三千数百人、ほとんど生きて帰れない。このままじゃ何の意味があるんだって。兵学校出身者は、とにかく戦って死ねばいいんだ、と。その時に、少・中尉の部屋、士官次室というそうで、その室長をしていたのが、臼淵という人。彼は厳として、こんなことを言います。「進歩のない者は、決して勝たない。負けて目覚めることが最上の道だ。日本は進歩ということを経んじ過ぎた。私的な潔癖や徳義にこだわって、真の進歩を忘れていた。敗れて目覚める。それ以外にどうして日本が救われるか。今目覚めずしていつ救われるか。俺たちはその先導になるんだ。日本の新生にさきがけて散る。まさに本望じゃないか」というのが、吉田さんが臼淵大尉に言わせた言葉です。

臼淵さんは海軍兵学校の出身です。これを読んだときに、そうかあって私も一種の納得がいくんです。私はちょっと思い入れが強すぎて、お笑いいただいているのですが。負けて目覚めることを、臼淵さんが私に求めた。私は負けて死ななかつた。もうじき死にそうだった。そのへんまで来たんです。死ななかつたということは、つまり生き残っているわけですから、生き残っているのだったら、要



するに負けて目覚めるしかない。負けるっていうのは、目覚める条件。だとしたら、そこで天皇はぶっとぶわけですよ。天皇が何を言おうが知ったことではないんです。負けるっていう、厳然たる事実があって、そこで目覚める。何に、何を目覚めるのか。臼淵さんは何も、規定しておりません。

少なくとも、臼淵さんたち、三千数百名の若者が、こんな強制されて死なないような、死なないで済むような、そういう事実を常態にする。それに目覚めろって言ってる。われわれが死ぬという、三千数百人が死ぬなんて、いいですか、一隻の船が沈む、軍艦が沈むということはそういうことなんです。陸上部隊で三千数百人が死ぬっていったら、もう大変なことになるのです。

どっちがいいなんて言ってるんじゃないですよ。だけど、やっぱり強制された死だけは、つまり死というものは、その人の、その人だけのものなんです。命が、その人のものであるということと、これ、マルクス主義的な意味での問題じゃないんです。要するに、なんていうのかなあ、つまり命の、自分の命の処分、あるいは処理の権限はその人にある。これははっきり申し上げていいと思うんです。だからそこでもって、要するに、この臼淵さんの言葉が、戦後の私を作ったと。

私はこれは言いませんでした。学生諸君に言わなかったと思います。これを私が学生諸君に言ってしまったら、学生諸君はそこでもって、もしかするとああそうかと思ってしまうかもしれない。自分でどこかで、いろんなぶつかり方があるわけですよ、いつも。一身にして二生という、それをご自分が作っていく。ご自分が発見していく。そういうことだろうと思うんです。

だったら、今日、何故しゃべったの。だってもう、お前さんたち、いい歳になったもの。そうでしょう。一番若い卒業生でももう、かなり、生きましたよ。だからもう、はっきり言えば、自分で探すことはできる。

<ポツダム宣言受諾の意味>

だからねえ、非常に困るんですねえ。私はだから終戦、実は敗戦っていう事柄は、戦後ということになったときに、意味が違ってきた。つまり敗戦っていうのはよく分からない。未だによく分からない。ポツダム宣言を、要するに、受諾するのですね。で、ポツダム宣言って、こんなふうにも未だに読んだことあるっていう人、少ないんじゃないですか。ほとんどないんじゃないですか。だって、



必要なくなっちゃった。じゃあ、今日は「ポツダム宣言」を聞いてください。長谷川君が読んでくれます。

資料の 164 ページです。

- 1 吾等合衆国大統領、中華民国政府主席及「グレート・ブリテン」国総理大臣は吾等の数億の国民を代表し協議の上日本国に対し今次の戦争を終結するの機会を与ふことに意見一致せり
- 2 合衆国、英帝国及中華民国の巨大なる陸、海、空軍は西方より自国の陸軍及空軍に依る数倍の増強を受け日本国に対し最後の打撃を加ふるの態勢を整へたり右軍事力は日本国が抵抗を終止するに至るまで同国に対し戦争を遂行するの一切の聯合国の決意に依り支持せられ且鼓舞せられ居るものなり
- 3 蹶起せる世界の自由なる人民の力に対する「ドイツ」国の無益且無意義なる抵抗の結果は日本国国民に対する先例を極めて明白に示すものなり 現在日本国に対し集結しつつある力は抵抗する「ナチス」に対し適用せられたる場合に於て全「ドイツ」国人民の土地、産業及生活様式を必然的に荒廢に帰せしめたる力に比し測り知れざる程度に強大なるものなり 吾等の決意に支持せらるる吾等の軍事力の最高度の使用は日本国軍隊の不可避且完全なる壊滅を意味すべく又同様必然的に日本国本土の完全なる破滅を意味すべし
- 4 無分別なる打算に依り日本帝国を滅亡の淵に陥れたる我儘なる軍国主義的助言者に依り日本国が引続き統御せらるべき力又は理性の経路を日本国が履(ふ)むべきかを日本国がけっていすべき時期は到来せり
- 5 吾等の条件は左(以下)の如し
吾等は右条件より離脱することなかるべし 右に代る条件存在せず吾等は遅延を認むるを得ず
- 6 吾等は無責任なる軍国主義が世界より駆逐せらるるに至る迄は平和、安全及正義の新秩序が生じ得ざることを主張するものなるを以て日本国国民を欺瞞し之をして世界征服の挙に出ざるの過誤を犯さしめたる者の権力及勢力は永久に除去せられざるべからず



7 右の如き新秩序が建設せられ且日本国の戦争遂行能力が破碎せられたることの確証あるに至る迄は联合国の指定すべき日本国領域内の諸地点は吾等の茲(ここ)に指示する基本的目的の達成を確保する為占領せらるべし

8 「カイロ」宣言の条項は履行せらるべく又日本国の主権は本州、北海道、九州及四国並に吾等の決定する諸小島に局限せらるべし

9 日本国軍隊は完全に武装を解除せられたる後各自の家庭に復帰し平和的且生産的の生活を営むの機会を得しめらるべし

10 吾等は日本人を民族として奴隷化せんとし又は国民として滅亡せしめんとするの意図を有するものに非ざるも吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては嚴重なる処罰を加へらるべし 日本国政府は日本国国民の間に於ける民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙(しょうがい)を除去すべし 言論、宗教及思想の自由並に基本的人権の尊重は確立せらるべし

11 日本国は其の經濟を支持し且公正なる実物賠償の取立を可能ならしむるが如き産業を維持することを許さるべし 但し日本国をして戦争の為再軍備を為すことを得しむるが如き産業は此の限に在らず 右目的の為原料の入手(其の支配とは之を区別す)を許可さるべし 日本国は将来世界貿易関係への参加を許さるべし

12 前記諸目的が達成せられ且日本国国民の自由に表明せる意思に従ひ平和的傾向を有し且責任ある政府が樹立せらるるに於ては联合国の占領軍は直に日本国より撤収せらるべし

13 吾等は日本国政府が直に全日本国軍隊の無条件降伏を宣言し且右行動に於ける同政府の誠意に付適當且充分なる保障を提供せんことを同政府に対し要求す 右以外の日本国の選択は迅速且完全なる壊滅あるのみとす

内山：どうも有難うございました。これが何を言ってるかわからないよっていうことだと思ふんですよね。私たちが非常に下手なのはですねえ、これは学生諸君に私は言ったことがあると思う。線を引っ張るときに、自分が分からないところに線を引くけれど、分かったところに線を引いてください。この、例えば1から



13 までですね、分かったところに線を引いたら、どこになるかということです。おそらく、一番、私たちが担ったところに線を引くことになるんですよ。あとは、どういうことか分からないんですよ。多分、そうです。ポツダム宣言だから、当時の鈴木貫太郎内閣の連中は読んでいるわけです。しかし、黙殺するということになって、対応してしまう。「黙殺」を英語でいうと何が一番いいのか、私わかりませんが、確か neglect という英語にしてしまったんじゃないですかね。

会場： ignore。

内山： ignore ですか。有難う。「無視する」ですね。鈴木内閣はポツダム宣言を ignore するのです。とにかくこちらが知らないところでそういうことをやっているわけですから。ただ、私たちは要するに、戦後になって、ポツダム宣言に加担するのです。

私は今日、新しい要素をぐじゃぐじゃにしながら、皆さんにぶちまけているのは、戦争に負けたということ、敗戦という言葉には、決して、自分たちの生き方が間違っていたというふうな反省が伴ってはいなかったということ。それを、最も端的に証明したのは、新しい憲法を作るプロセスで、日本の政府の側が最初に作った案。これは、天皇主権ですよ。明治憲法と変わっていないんですよ。

われわれはポツダム宣言を受諾したんですね。気に入るとか気に入らないとかの問題じゃない。受諾したんです。ポツダム宣言の何を受諾したのか。私らが、そのときにポツダム宣言を読む力をもっていたら、これは間違いなく、民主主義です。つまり普遍性の問題です。さっき申し上げた大東亜共栄圏という発想と、ポツダム宣言の発想が、限定された意味で一種の普遍性をもつ。少なくともある広がりをもっています。普遍性をある程度もっています。しかし、その大東亜共栄圏の普遍性は、地理的に決められたものだったわけですよ。

かつてヨーロッパが近代市民革命をやって、それで「市民」という概念を広げて広げて広げていくわけです。やむを得ず広げたんですよ。ほんとは広げたくなかったかもしれない。労働者にまで広げていったんですよ。貴族から、労働者に権利が広がっていくわけです。そういう形で、近代市民あるいは近代の理念というのが、好むと好まざるとに関わらず、普遍性をもった。



＜普遍性への渴望＞

ところが大日本帝国は、残念ながら、そういった普遍概念は作れなかった。「八紘一宇」、嘘ですよ。無理でしょう、八紘一宇って天皇の優れた影響力っていうんでしょう。これが、普遍性をもち得るんですか。無理でしょう。天皇っていい人ですよ。会ったことないけれど。(笑) 昭和天皇の、なんか変なアクセントっていうか、いい人に決まっていますよ、あんなアクセントでしゃべれる人って。

われわれが学ばなかったのは、普遍的なものに対する、なんていうか渴望だと思うのですね。それは、久野収さんが、天皇制の「顕教」、天皇制の「密教」ということで、指摘をされた。初等教育から中等教育および軍隊では、天皇制の顕教、つまり天皇絶対論を断定的に教え込んでいくのです。そして支配層に対する高等教育、大学や高等文官試験に至って初めて天皇制の密教、つまり天皇国家機関説というか、国家の実体が明らかにされていくのです。だから、それは密教を学んでも力にはならないということなのです。ところが、もし普遍性ということをごの中に求めるならば、天皇しか普遍性を、与えられなかった。そんな普遍性なんてありえようはずがないんだ。

普遍性に対する信仰、これが、はっきり言えばポツダム宣言の受諾だったんです。これがほんとに分からないことです。ものすごく分からなかったことです。占領軍についての本をいろいろ読んでみますと、占領軍の政策に抵抗する。それがフランスのかつてのナチス占領下におけるフランス人、イタリア人の抵抗、レジスタンスと、同じように考えられている。そうかもしれませんが、実際には。確かに占領軍は軍隊ですから、強権発動があるのです。だけどそれは別にして、われわれ自身が、普遍性というものに対して初めて直面していくわけです。それになかなか気がつかない。

それは民主主義という言葉だけを、いじっちゃうからでしょうね。確かにひとつひとつ戦後の歴史を紐解いていくと、そこには痛烈な努力があります。百も承知です。でも今、われわれは今を生きている。今を生きていることをしていくわけですから、「戦後」という言葉のもつ意味を考えてみてください。それは、われわれの歴史を数えるひとつのメルクマールですよ。西暦で数えることも必要でしょう。私はほとんど認めませんが、元号が好きな人は元号を使うというこ



ともありうる。だけど戦後ということがカウントできる。戦後は終わらない、未だに。戦争っていうのはあれだけものを残しちゃう。こんなに残しちゃったって戦争は、そんな戦争は私たちは知らなかったんですよ。ずーっと戦争やってきたって言いますけれど。

そういうことですね、私が今日、皆さんにお話ししたかったことは。この要するに一点をお伝えしたかった。ただ、あまりにあの戦争、あるいは敗戦体験が個別化してしまっているものだから、暑い日だったよとか、あの時みんなで泣いたんだよとか。そういうことじゃなくて、自由に、戦後自由になる。その意味を考えてください。

私の話はもうやめます。何かご発言なり、内山違うぞっていうことがあったら聞かせてください。

私は今日、かなりいろんなものを外してお話ししてしまったのですけれど、決して自民党の連中がダメだとか、そういうふうに申し上げているのではないのです。この人たち、普遍性ということをごちゃんと知っていますよ。ただ、形容詞をつけちゃうんですね。普遍性っていうのは、形容詞がつかない。つまり普遍性というものを限定するような形容詞はつかないんですよ。もっと不思議な人がいますからね。自由民主主義っていうのは俺のこったみたいな、なぜかっていうと俺は自民党員だからって。非常に面白い連中。私は現に言われたことがある。で、まじまじとその人の顔を見ました。昔、東京帝国大学っていうのは、そういう人を作ってたんですかね。

皆さん、何か、黙ってる。はい、どうぞ。

<Q & A>

会場男性：先生は、戦後は終わったとお考えか、終わらないのか、あるいは、もし戦後は終わっているとお考えだとするならば、いつ戦後は終わったかとお考えでしょうか。

内山：私は、戦後は終わってないと思います。終わられないんですよ。終わるかなあと思うとまたによこによこ出てくる。終わらせようと思っている努力というのは、かなりあると思う。たとえば今度のサッカーにしても、この前の野球にし



でも、ああいう世界レベルのスポーツ大会というのは、それに利用されてしまうのですよね。私は選手が悪いなんて言っていませんよ。決して愛国心がどうのこうのと申し上げているのではなくて、作られている。ああしたスポーツ中継をやっている時って、マスメディアに全部、乗っ取られちゃうでしょう。この中にマスメディア関係の方がいらっしゃるかもしれないけれど、「何考えてんだよ馬鹿野郎」って言いたいですね。だから私は、戦後は、終わっていないと思っている。

会場女性：民主主義の根拠というものを見つけていかなければいけないと、今、私は政治の世界にいますけれども。今、まさにその普遍的な価値であったり、民主主義というものが、きちっとつながっているもの、日本国憲法というものがですね、変えられようとしている。その普遍的な価値とは反対の方向に今、動こうとしている。そうだとすればこれからの日本の中で、私たちはどういう形で、民主主義とかその普遍的なものを獲得する過程というものを、まさに今、憲法が改正されようとしているものに対抗する動きの中で、日本人というか、日本に暮らすものたちが、そういう価値を見つける、自分たちの中に落としていく作業になりうるのか。または違う形で例えば、韓国などは、さまざまな血を伴った民主化運動があったわけですが、一体この国の人たちは、どういう形で価値というものを見つけていくのだろうか。そこについて何か先生は、どういうふうにお考えでしょうか。

内山：わかりません。(笑) いやもう、ほんとに分からないのですよ。どうすればいいとか。ただ、ちょっと、変に取られると非常に困るのですけれどね、人それぞれの場でもって、やりましょう。やるよりしょうがない。あるときにですね、ある人と私が大口論したことがあります。そのときに止めにはいった人がいた。私と喧嘩したのは編集者だったのですが、その編集者に「黙れ」と言った。「人間はそれぞれ戦場を持ってるんだ」って言ったら、その人、黙っちゃった。そういう、ひとりひとりに戦いみたいなものがある。

ひとつだけ伺いたいのは、あなたは政党政治を、承認しますか。

会場女性：今の政党政治のあり方が、私にとっての理想の形であるとは言えない



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

のですけれども、

内山：ええ、ええ。

会場女性：しかしやはりこの制度をいかにより良いものにしていくのか、ということが大切なのだと思って頑張っています。

内山：うん、うんうん。私が今、あなたに伺ったのは、政党政治以外に方式、方法があるのじゃないかということをも、あなたの中にどこかにあるとしたら、それは、大変危険だということなんです。私は政党政治というものをほんとうに、365日のうちの366回ぐらい、死に体だと思っているところがあります。だけれども、他に方法がない、今のところ。それでかつては、それをいじることでですね、あたかも革新政治というのは、政治手段のごとき錯覚があったのです。それで見事に非常に大きな失敗をやった。自民党は。あれが政党政治だよと言う人がいるんですけれども、うそだよ、そりゃ無理だよ。そうするとですね、例えば、今の政治家たちの発言を聞いていると、政策と改革という言葉でもって、すべてが前に進むというふうには考えていないんですね。何が前に進むのでしょうか。

政策分析はやらなきゃいけない。ところが今は政策を推進することばかり考えている。学者先生たちもそうですよ。そうではなくて、政策を分析することによって、批判の対象にしていかないとですね、お尋ねのことや、改革というのは、全部吸い取られてしまうんです。私はもうそっちは下手だし、力がない。できませんけれどね。それぞれの場でもって突っ張るしかしょうがない、と思っています。

あまりにも政策とか改革という言葉でもって、言葉に追随しすぎませんか。そこでもってひとつ、踏みとどまってほしい。おひとりおひとりが。それで考えてほしい。やっぱり、おかしいですよ、これでいいんだなんてとても言えないじゃないですか。いや、これでは生きているのが嘘になってしまいます、正直言って。おしまい。(笑)

司会：有難うございました。



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

当日の配布資料

- ① 米英への宣戦詔書
- ② 終戦の詔書
- ③ ポツダム宣言
- ④ 信濃毎日新聞「潮流」2005.11.12 付「新憲法案の主権在民」と2006.5.31 付「『愛国心』教育のねらい」コピー [内山先生寄稿]